英語科における指導と評価の一体化を目指して

－実践的コミュニケーション能力を育てる取組を通して－

高知市立一宮中学校　　教　諭　　森　佳奈子
高知県教育センター　　指導主事　　山中　由香

「実践的コミュニケーション能力」を育てるために、「聞くこと」「話すこと」「読むこと」「書くこと」の４つの領域を相互に関連して指導する技能統合型活動の一つとして、テーマに基づき、一定期間取り組むプロジェクトを行った。そして授業の中で行う活動の評価を学習に生かし、継続的かつ効果的にフィードバックを行うことで、技能の定着を図り、自己評価力・自己教育力を伸ばす取組をした。個々の生徒の英語力を高めるため、活動中および活動後の支援方法について、事前に評価およびフィードバック計画を立て、準備をしておくことで、指導と評価の一体化を目指した。
キーワード：技能統合型活動（プロジェクト）、評価（AOL・AFL）、フィードバック（Marking Policy）

1　はじめに

平成 14 年度より施行された新学習指導要領では、自ら学び、自ら考えることができる「生きる力」を育むことが重視され、英語科においては「実践的コミュニケーション能力」を最重要目標として取り組むことになった。そして目標に準拠した評価（いわゆる絶対評価）がより一層重視され、学校現場では、評価に関する工夫・改善が求められている。私たちは、生徒の学力の実態を的確に把握し、個に応じた指導と評価の一体化を目指し、取組を進めていかなくてはならない。

平成 13 年度の教育課程実施状況調査報告書によると、どの学年も「書くこと」が苦手であり、英語の語順が定着していないこと、また「英語での問いかけに応答する」ことが苦手であることが明らかになった。このことは、「書くこと」の指導を見直すことも重要ではあるが、「話すこと」が十分に定着していない、「話せる」ことが「書ける」力にまで至っていないからではないだろうか。

昨年度、勤務校の 1 年生を対象に行った英語学習に関する調査結果で、英語の学習を始めて間もない 6 月始めには、生徒達の学習状況は、「英語が好き」が学年の 68.8%を占め、授業の活動では、授業のメインとなる活動よりも、授業の初めに行う一定の決まった活動をがんばってやっていると認識している生徒が一番多いことがわかった。また、自主ノートなどを使っての英語の家庭学習に 75.3％の生徒が取り組んでおり、その中には非常に多くの勉強量をこなす生徒もいた。多少の推移はあるものの、そういった学習を続けていって、12 月に再度行った調査では、自己紹介スピーチのＡレベルは 81.8%、その後の自己紹介筆記テストでもほぼＡレベルだった。しかし、1 学期・2 学期と継続指導して行ったスピーチと筆記テストでは、ある程度結果につながっているが、アンケート結果では約６割の生徒が、日常の授業の中で「言えても書けない」と感じており、また「どう英語で言ったらいいのかわからない」と思っている生徒も決して少なくはなかった。1 学期から生徒たちが自主的に行ってきた英語学習は、本当に効果的な学習なのだろうか、という疑問がわいてきた。そこで、週３回の授業で実践的コミュニケーション能力をつけるためには、自己学習につなげていく自己評価力・自己教育力を高めていく必要があるのではないか。そしてこの自己評価力・自己教育力は、授業で行う言語活動へのフィードバックを工夫することで高められるのではないか、と考えた。

2　研究目的

そこで、研究仮説は、「各言語活動に適したフィードバックを継続的に実施することにより、生徒の自己評価力・自己教育力を高めることができる。」とした。英語の授業で行う言語活動中と活動後に、どういった形で、どういったフィードバックが効果的なのか、また特に、話す活動と書く活動を連動させるために、どのように活動を工夫し、限られた授業の中でどのようにフィードバックを行っていけばいいのかを研究した。

また、授業で私たち英語教員が行う言語活動を評価の面から分類する場合、新潟大学教授 松沢伸二氏によると、AFL（Assessment for Learning:学習のための評価。形成的評価の１つで、フィードバックのための評価とも呼ぶ。生徒の学習支援が主目的の非公式な評価。評価情報の補助簿への記入は随意。）と AOL（Assessment of Learning: 学習の評価。総括的な評価で、ミニ総括的評価として用いる場合は、評定用の評価情報を継続的に収集する正式な評価になる。評価情報の補助簿への記入は必須。）の２種類がある。指導と評価の一体化を考えた時、AFL を数回実施し、発話チェックなどを通して非公式な評価をし、生徒に明確なフィードバックを与え、生徒の学習を十分支援した後、正式な AOL を行い、また次の指導に活かしていくことが重要である。（補遺（Appendix）２年評価活動計画参照）そこで本検証では、AFL と AOL の２種類の活動を行い、どうフィードバックしていくことが『生徒の自己評価力・自己教育力の向上に』指導上効果的であるのかを検証した。

3　研究内容

(1)　技能統合型活動について

「話すこと」と「書くこと」を連動させた技能統合型活動には、スキット、スピーチ、タスク活動、プロジェクトなど様々な活動があるが、本検証では、２学期を通しての活動プロジェクトを「地域を紹介しよう」に設定し、プロジェクトへの取組について行った。スパイラルに指導を積み重ね学習したことの評価活動（AOL）として、紹介したい地域について、どんな所があるのか、自分の考えやみんなに伝えたいことなどを書いて話す活動と、その事前指導として、学習のための評価活動（AFL）を行う。検証授業は、合計３時間で行った。学期のプロジェクトの中に位置づけたタスク活動（Task Activity 以下 TA と記載）へのステップとして、２時間目の指導の中にタスクを志向した活動（TOA：Task-Oriented Activity ）を行い、２人の会話のシミュレーションを行った。

①　３時間の指導の実際　（プロジェクト「地域紹介」）

学期末の活動３時間分を、評価・フィードバック計画（以下の（２）の検証授業用 Marking Policy 参照）を立て、実施した。

授業単元　New Horizon English Course ２「Unit 6 Christmas Is Coming」
授業対象生徒　高知市立一宮中学校　第２学年　４クラス（計 155 名）
１組（男子 21 名　女子 18 名　計　39 名）
２組（男子 21 名　女子 18 名　計　39 名）
３組（男子 20 名　女子 18 名　計　38 名）
４組（男子 21 名　女子 18 名　計　39 名）
授業実施日　2004 年　12 月 14 日（火）15 日（水）16 日（木）17 日（金）
指導教員　T1 森　佳奈子(JTE), T2 中岡　良夫, 井上　真 (JTE)
ALT ギャレット・クラン,　キーラン・ドーキンス

授業は、全授業を T1・T2・ALT の３人で行った。ALT は、クラン先生が最初の３日間、17 日のみドーキンス先生が担当した。　T2 は、最初の３日間を井上先生、17 日のみ中岡先生が担当した。

ア　本課の評価規準

ア　ｺﾐｭﾆｹｰｼｮﾝへの関心・意欲・態度	イ　表現の能力	ウ　理解の能力	エ　言語や文化についての知識・理解
①自分の地域にあるものをたくさん言おうとしている。(S) ②自分の地域にあるものをたくさん書こうとしている。(W)	①There is/ are ～の表現や動名詞を使って状況などを正しく話すことができる。(S) ②既習の構文などを使って状況を適切に話すことができる。(S) ③正しい表現で地域紹介文などを書くことができる。(W)	① 英語の情報を正しく聞き取ることができる。(L) ② 「きよしこの夜」の話を正しく読み取ることができる。(R)	①There is/ are ～の表現や動名詞の表現の運用について基礎的な知識を身につけている。

L（聞くこと）S（話すこと）R(読むこと)　W（書くこと）

イ　指導と評価の計画

時数	言　語　活　動	評価規準との関連	方　法	評　価　規　準
1	Unit 6-1 ・Picture describing（ﾍﾟｱで会話）	AFL エ①	ﾜｰｸｼｰﾄﾁｪｯｸ	・There is / are …の構文を理解している。 (S) (W)
2	Unit 6-2 ・「違いを探そう」（ﾍﾟｱでの会話）	ア① イ①	観察 観察	・間違いを恐れず英語で積極的に話している。 ・Is / are there …? の構文を使って正しく話せている。(S)
3	Unit 6-3 ・動名詞の用法を理解し慣れる。 （ｸｲｽﾞ Who am I ? ）	イ① ウ①	観察 ﾜｰｸｼｰﾄﾁｪｯｸ ﾜｰｸｼｰﾄﾁｪｯｸ	・動名詞の構文を正しく使って、なりきり自己ｱﾋﾟｰﾙをする。(S) ・誰のことを言っているのか理解する。(L)
4	Unit 6-3 ・「きよしこの夜」の話を読んで理解する。	ウ②	観察 ﾜｰｸｼｰﾄﾁｪｯｸ	・本文を正しく理解する。(R)
5	☆1 Project「地域紹介」 ・ｲﾝﾀﾋﾞｭｰ (Communication Activity) ・Project「地域紹介」原稿作成１	イ① ア②	観察 ﾜｰｸｼｰﾄﾁｪｯｸ	・There is などの文を使い、正しく地域を紹介できている。 ・地域紹介の文を積極的に書く。(W)
6	☆2　Project「地域紹介」 ・TOA「うまくﾚﾎﾟｰﾄできるかな？」 ・Project「地域紹介」原稿作成２	イ① イ③		・正確に英語でﾚﾎﾟｰﾄができる。(S) ・地域の新しい情報を加えながら、地域紹介の文を正確に書く。(W)
7	☆3　Project「地域紹介」 ・Project「地域紹介」原稿完成３ ・Small Speech	AOL イ③ AFL イ①	ﾜｰｸｼｰﾄﾁｪｯｸ 観察・ﾜｰｸｼｰﾄﾁｪｯｸ	・正しい表現で地域紹介文を書くことができる。(W) ・正しい表現で地域紹介をすることができる。(S)
まとめの学習	・自分が小さかった頃の地域を調べ今と変わった所、または未来の住みやすい一宮中周辺の様子をﾚﾎﾟｰﾄする。（冬休みの課題）	AFL ア② イ③	ﾎﾟｰﾄﾌｫﾘｵ	・昔の地域または未来の地域についてたくさん書こうとしている。(W) ・正しい表現で地域紹介文などを書くことができる。(W)

後日	・後日ﾍﾟｰﾊﾟｰﾃｽﾄ ・ｽﾋﾟｰｷﾝｸﾞﾃｽﾄ TA「地域紹介」	AOL エ① イ③ ウ① AOL イ① イ②	ﾍﾟｰﾊﾟｰﾃｽﾄ ﾍﾟｰﾊﾟｰﾃｽﾄ ﾘｽﾆﾝｸﾞﾃｽﾄ ｽﾋﾟｰｷﾝｸﾞﾃｽﾄ	・There is/ are ～の表現や動名詞の表現の運用について基礎的な知識を身につけている。 ・正しい表現で地域紹介文などを書くことができる。 ・英語の情報を正しく聞き取ることができる。 ・There is[are]～の文と～ is[are]…の文を使い分けて話すことができる。

☆１・２・３Project「地域紹介」が検証授業

＊自己評価力・自己教育力についての行動目標

・どこがわからないのか、どこができていないのかがわかる。

・次にどういう学習をしたらいいのか、どういう点を改善したらいいのかがわかる。

・授業中の活動や自主学習などで、自分の課題に実際に挑戦することができる。

・ 指導教員や級友のアドバイスを判断して、時には受け入れ、時には拒絶して、自分の原稿をよりよくすることができる。

ウ　１時間目の目標

・There is/ are ～の表現を使って、家のまわりにあるものについて、たくさん言ったり書こうとしている。

・There is/ are ～の表現を使って、家のまわりにあるものを正確に話したり書いたりすることができる。

・地域の紹介を聞いて、地域に何があるのかを正確に理解することができる。

展開

過程	時間	言　語　活　動	指導内容・留意点		評価
			Ｔ１	ALT・Ｔ2	
1　あいさつ	2’	あいさつをする	あいさつをする	あいさつをする	
2　復習 ① ALT の地域紹介	8’ 3’	① 前時までの単語・表現を Picture Flash Card で復習し、「地域紹介表現」をﾍﾟｱで確認する。 ② ALT の話す地域の紹介を聞いて地域に何があるのか、どんな状況なのかを理解する。	・Picture Flash Card を見せながら発音させる。 ・ﾍﾟｱ活動を支援する。 ・ALT に Is there ～？で質問したり ALT が話した情報を言いかえて確認する。	・ALT が発音指導 ・Ｔ2 は生徒間で元気に声がでるように支援する。 ・ALT が地域紹介をする。 ・Ｔ2 も地域について話す。	ウ①L(観察)
3 ｲﾝﾀﾋﾞｭｰ	13’	③ Is[Are] there ～?を使ってﾍﾟｱｲﾝﾀﾋﾞｭｰをする。	・全員が質問や応答ができるように支援する。	・質問や応答をするのを支援する。	イ①S(観察) ☆P.E 1
4 自己表現活動 「自分の家のまわりにあるもの」 Project 1	20’	④ ﾏｯﾋﾟﾝｸﾞｼｰﾄを使って、地域紹介をする内容を考える。 ⑤ There is[are]～.の表現を使って、家の周辺にあるものをﾜｰｸｼｰﾄに書き出す。 ⑥ 家のまわりにあるものをｸﾞﾙｰﾌﾟに紹介する。	・ﾏｯﾋﾟﾝｸﾞｼｰﾄの使い方を指導する。 ・Marking Policy に従い指導する。 (次時にﾌｨｰﾄﾞﾊﾞｯｸ) ・発話が進まないｸﾞﾙｰﾌﾟを支援する。	・生徒のｼｰﾄへの記入を支援する。 ・ﾜｰｸｼｰﾄへの記入の例を示し支援する。 ・発話が進まないｸﾞﾙｰﾌﾟを支援する。	ア②W・イ③W(ﾜｰｸｼｰﾄﾁｪｯｸ) ア①S(観察) ☆P.E 2

5 まとめ	4’	⑦ 学習したことを確認し、自己評価をする。	・学習したことを確認する。	・生徒の理解を支援する。	☆S.E

＊評価は全て AFL とする。

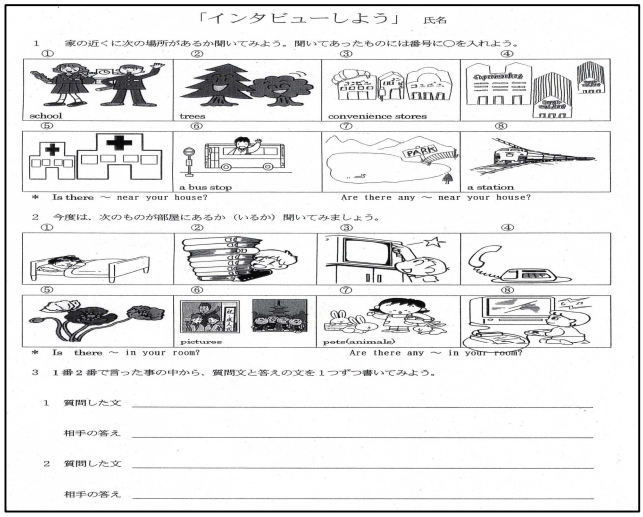
☆P.E （相互評価） 1 ペアの生徒が、パートナーの生徒のインタビューの質問や受け答えを聞いて、相互評価表に、次回の活動をより良くするためにはどうしたらいいのかアドバイスを記入する。

2 グループの中の１人の生徒が、「家のまわりにあるもの」の話を聞いて、相互評価表に、次回の活動でもっと発話できるようにするためのアドバイスを記入する。

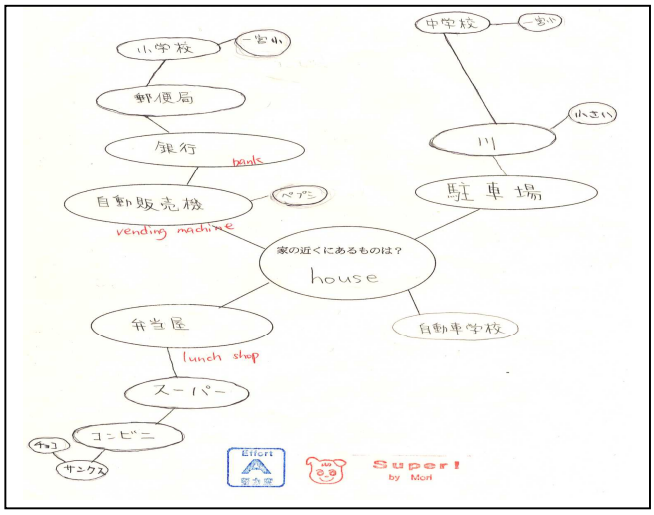
☆S.E （自己評価） 発話中の間違いの訂正を確認するとともに、各活動を振り返って、次の学習にどのように取り組んでいけばいいのかを考える。

下の２つの活動シートは、インタビューの活動で使用したものと、自分の家のまわりにあるものをワークシートに書き出すために、何をどう説明するのか考えるのに使ったマッピングシートである。

活動１ インタビューシート



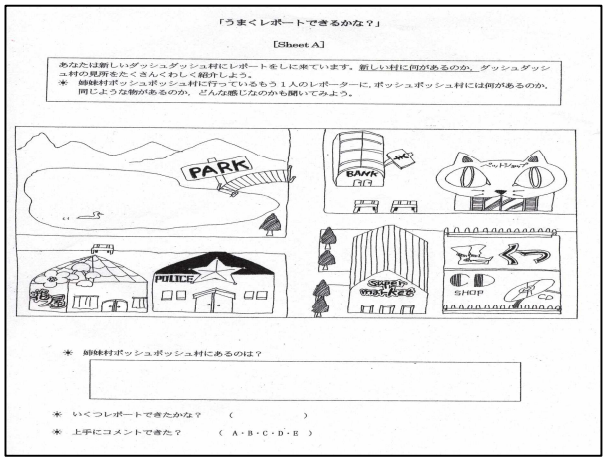
活動２ マッピングシート

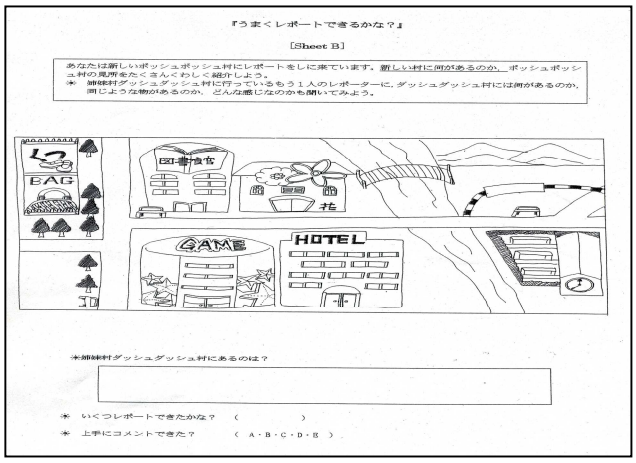


エ ２時間目に行ったタスクを志向した活動（TOA：Task-Oriented Activity）

タスクを志向した活動（TOA）とは、言語形式の定着を重視するために、モデル・ダイアローグや語彙は与えるが、タスクやタスク活動と同様に、課題解決を目標に持つ言語活動である。ペアのそれぞれが、２つの村に何があるのか、どんな状況なのかをレポートをする活動（活動３参照）で、発話中の間違いは Marking policy に従い指導し、活動後には、言えない表現を確認する。また、ペアの生徒が「村のレポート」を聞いて、相互評価表に次回の活動をより良くするためにはどうしたらよいのかアドバイスを記入する。

活動３ 「うまくレポートできるかな？」





オ　３時間目の目標

・地域紹介を聞いて、積極的に質問したりコメントを言おうとしている。
・There is/ are ～の表現や既習の表現を使って、地域の紹介を正確に話したり書いたりすることができる。
・ 地域の紹介を聞いて、地域に何があるのか、どんな状況なのか、話し手の言いたいことを正確に聞き取ることができる。

展開

過程	時間	言　語　活　動	指導内容・留意点		評価
			Ｔ１	ALT・Ｔ2	
１あいさつ	2’				
4 Project3「地域を紹介しよう」	28’	③ 原稿を仕上げ、発表に向けて準備をする。 ④ ｸﾞﾙｰﾌﾟの人に地域紹介をする。（原稿は見ない） ⑤ ｸﾞﾙｰﾌﾟの地域紹介後、それぞれの紹介に対して質問やｺﾒﾝﾄを言う。発表者はそれぞれの質問に応答する。	・原稿の仕上げを支援する。 ・ｸﾞﾙｰﾌﾟの活動を支援する。 ・質問とｺﾒﾝﾄの準備を確認する。 ・質問や応答がｽﾑｰｽﾞにできるよう支援をする。	・原稿の仕上げや発表練習を支援する。 ・ｸﾞﾙｰﾌﾟの活動を支援する。 ・生徒の発話の支援を行う。	☆P.E 1 イ①S(観察・ﾜｰｸｼｰﾄﾁｪｯｸ) イ③W(ﾜｰｸｼｰﾄﾁｪｯｸ) ☆P.E 2 ア①S(観察)
5　まとめ	5’	⑥ 学習したことを確認し、自己評価をする。	・学習したことを確認する。	・生徒の活動を評価する。	☆S.E

＊　Project 3「地域紹介」の原稿の評価は AOL として扱う。

☆P.E （相互評価）１　グループの生徒が「地域紹介文」を読み、間違いがある場合には鉛筆で下に訂正する。
２　グループの中の１人の生徒が、「地域紹介」の話を聞いて、相互評価表に、次回の活動でもっと発話できるようにするためのアドバイスを記入する。

☆S.E （自己評価）　　発話中の間違いの訂正を確認するとともに、各活動を振り返って、次の学習にどのように取り組んでいけばよいのかを考える。

図１（写真１）

グループで地域紹介をする前に、原稿のチェックを生徒同士で行う(peer correction)。地域紹介は、できるだけ原稿を見ずに、自分の地域の紹介を詳しく行い、発言をしている生徒以外はマッピングでメモを取る。グループ全員の発表が終わると、それぞれの地域紹介について、英語で質問をしたり、コメントを言い合う。（写真１参照）マッピングでメモを取りながら聞き取ったり、英語で質問やコメントする際、わからない表現などを生徒同士で支援し合うのを、教員がサポートする。

自己評価表　③　から

今日の授業を振り返って自己評価してみよう。（３はありません。普通と比べてどう？　５が good ）

①　先生の地域紹介の会話を聞いて理解できた。	1	2	4	5
②　原稿をあまり見ずに地域紹介を行うことができた。	1	2	4	5
③　原稿の間違いを訂正し、情報を付け加えて提出できた。	1	2	4	5
④　グループの地域紹介を聞き積極的に質問やコメントが言えた。	1	2	4	5
⑤　今日の授業を楽しめた。	1	2	4	5

評価　１：ほとんどできなかった　２：あまりできなかった　４：まあまあできた　５：ほぼできた

相互評価表　３時間目から

ペアの人が記入　あなたのペアの人にアドバイスをしてあげよう

活動　１　「地域を紹介しよう」

１　できていたと思う項目の番号に○をつけましょう。　他にもできたことがあれば、その他の（　）に書いてあげましょう。

１　ペアでチェックし合い、地域紹介の文をワークシートの 2/3 以上書けた。
２　簡単な絵など、発表の準備がよくできていた
３　ほとんど原稿を見ずに地域紹介ができていた
４　他の人にわかるようにはっきりと言えていた
５　質問とコメントが言えた
６　間違いの訂正などを記録できていた
７　その他　　（　　）

(2)　評価とフィードバック

一定の評価とフィードバックを生徒に継続して行うため、教員用(AFL･AOL)２種類、生徒用(AFL)、生徒相互用(AFL)の４種類の検証授業用 Marking Policy を作成した。それぞれ、努力度・達成度などで、総合評価をし、コメントを記入する。そして、様々な場面でのフィードバックを具体的に計画しておく。

①　Marking Policy For Teachers　（AFL）　から

間違いの訂正について　（抽出）

① 書くこと　（活動中及びワークシートチェック）

ア　記号での間違い提示

・下線(Underline)：スペルミス

・ ⇄　（左右への矢印）：語順が違っている

イ　一部のキーワードを、ヒントとして欲しい要求があった場合教える。

○　あまり書けない場合の指導：文の成り立ちを指導し、基本文などをいくつか一緒に書く。

②　話すこと（発話中）

（ア）　間違っていることを伝え訂正をさせる。

・ Is that correct? Uh?　などの言葉を投げかけ、訂正を要求する。

・ 生徒の言った文の一部を変え、別の表現で発話内容を確認する。

（イ）　教員が直接間違いを訂正する。

○　あまり話せない場合の指導：大きな間違いや言えない部分を確認させ発話を続けさせる。

（活動後）

・　振り返りシートなどで言えなかった表現を確認させる。

・　MD・テープなどによる指導(貸出)

・　教員(ALT、JTE)の口頭による個人指導

②　Marking Policy For Students　（AFL）　から

生徒用(AFL)は、がんばれたことや、できなかったことを書き、間違いの訂正の仕方をいくつか提示する。

間違いの訂正について　（抽出）

①　書くこと

ア　先生やグループの人からの間違いの訂正を記録し、間違いを消さずに、新たに新しい訂正文を書く。

イ　ヒントで教えてもらった単語や文は赤ペンで書く。

②　話すこと（発話中）

・　間違いを訂正し、正しい文を確認する。

（活動後）

ア　訂正された間違いを記録する。

イ　授業のペアまたはグループで正しい表現などを確認・練習

ウ　先生に指導してもらう。

・　MD・テープなどを先生(ALT、JTE)からもらい練習する。

・　個人的に、正しい言い方を先生（ALT、JTE）に指導してもらう。

③　Marking Policy Among Students　（AFL）　から

また、生徒相互用(AFL)では、総合評価（努力度・達成度）とコメント（できたことやアドバイスなど）を書く。間違いの訂正に関しては、「書くこと」においては、単語・文を口頭で伝えたり、間違っている箇所の下に鉛筆で訂正をする。「話すこと」（発話中）においては、間違いを訂正し、正しい文を確認し合う。活動後には、生徒個人用と同様に、MD などを使ってペアやグループで練習をしたり、教員（ALT、JTE）にペアやグループで指導してもらう。

(3) 検証について

検証仮説は、「各言語活動に適したフィードバックを継続的に実施することにより、生徒の自己評価力・自己教育力を高めることができる。」であるが、実際的な技能の面からも、フィードバックが効果的に働いたかどうかを見るため、プレテストとポストテストを実施した。また、検証授業での自己評価力・自己教育力についての行動目標を、a)どこがわからないのか、どこができていないのかがわかる　B)次にどういう学習をしたらいいのか、どういう点を改善したらいいのかがわかる　C)授業中の活動や自主学習などで、自分の課題に実際に挑戦することができる　d）指導教員や級友のアドバイスを判断して、時には受け入れ、時には拒絶して、自分の原稿をよりよくすることができる、の４項目を設定した。

①　活動後のフィードバックについて

話す力と書く力をつけるために、発話中及び書いた文章の評価と間違いの訂正を、あらかじめ決めておいた Marking Policy に従って指導する形で検証する。Marking Policy には、支援が必要な

生徒への対応も考慮し、支援対策を立てておいた。授業は、指導教員とＴ２及び ALT の３人で行った。担当指導教員全員で、Marking Policy を共通理解し、一貫した指導を行った。４クラスで行うそれぞれのフィードバック計画は以下の通り。１・２・４組が実験群、３組が統制群である。

ア　授業中の指導及び生徒の提出したワークシートを、すべて検証授業用 Marking Policy に従い指導する。（２年４組）

イ　生徒の提出したワークシートのみ、検証授業用 Marking Policy に従い指導する。（２年２組）

ウ　授業中の指導のみ、検証授業用 Marking Policy に従い指導する。（２年１組）

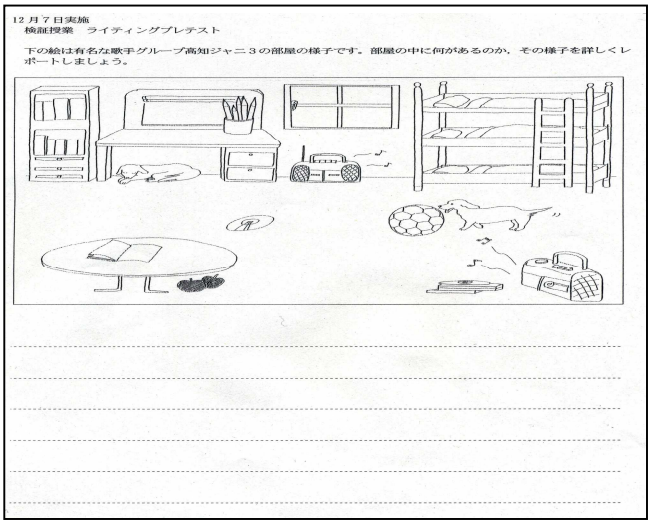
エ　授業中の指導も生徒のワークシートの指導も、事前に計画準備をせず行う。発話中のフィードバックも、教員が直接間違いを訂正する方法のみとする。（２年３組）

（検証授業用　Marking Policy 参照）

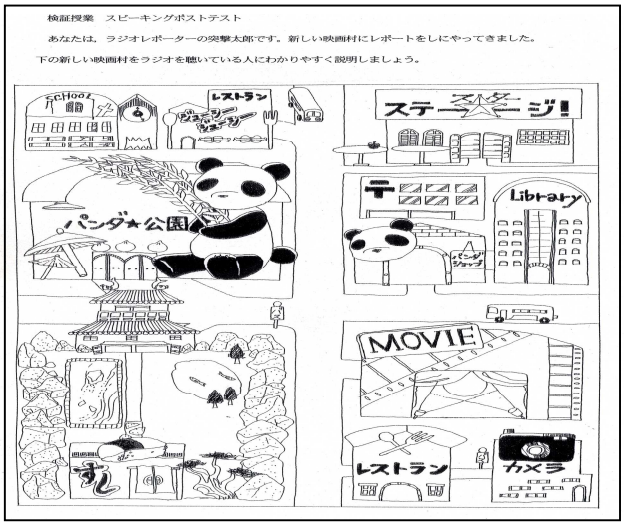
②　プレテストとポストテストについて

検証は、「継続的なフィードバックによって、自己評価力・自己教育力を高めることができるかどうか」だが、実際的な技能の面からも、フィードバックが効果的に働いたかどうかを見るため、プレテストとポストテストを実施した。ライティングテストは、全クラス全員を対象に 15 分で行った。（活動４のプレテスト参照）スピーキングテストは、各クラスから、英語が得意な生徒から苦手な生徒まで６名程度を抽出し、５分で行った。（活動５のポストテスト参照）ライティングテストとスピーキングテストの場面については、両方とも、プレテストは部屋の様子について、ポストテストは町の様子について行った。それぞれのテスト終了後、行動目標についてのアンケートを行った。

活動４　ライティングプレテスト



活動５　スピーキングポストテスト



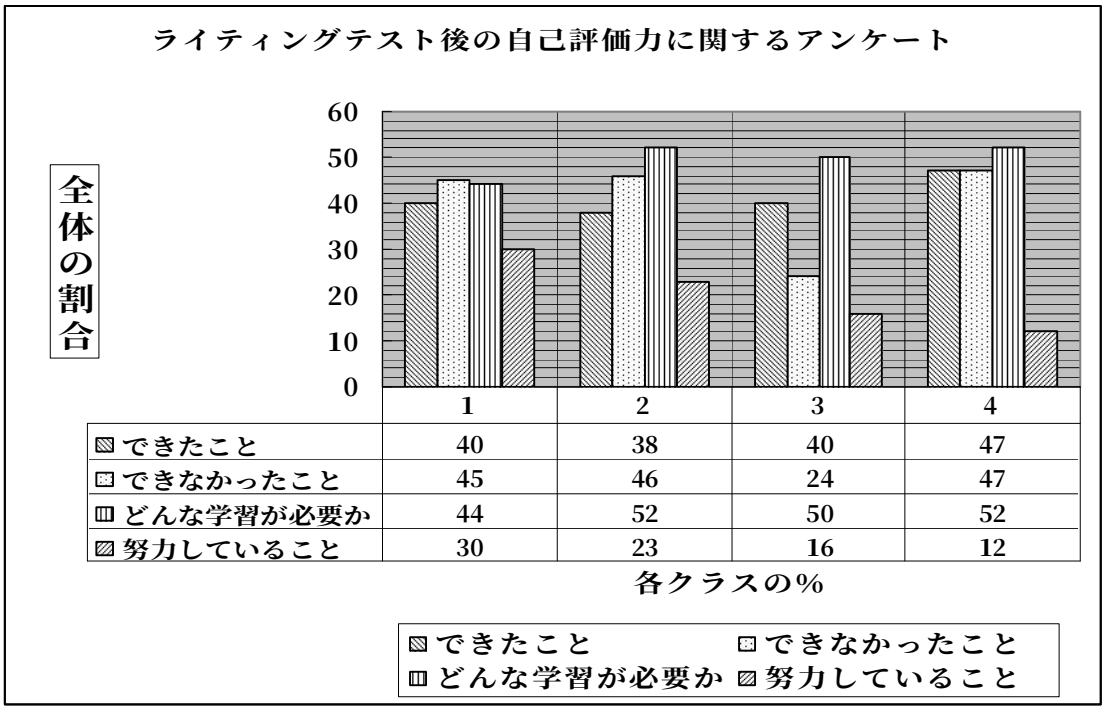
(4)　検証結果について

①　ライティング結果

ライティングテストの結果について、３時間目のライティング活動で、１番多く正確な文を書けたのは３組だった。しかし、間違いをすぐに訂正せず、自分で考える過程を大切にし、Marking Policy によってフィードバックをした４組が、テスト結果では、書いた量においても、質においても、実際に自分で書く力を伸ばしている。また、間違いの内容について、プレテストで多かった文構成上の文法的なミスは減ったが、どのクラスでも、スペルミスや冠詞の付け忘れが気になった。（補遺

（Appendix）図１－①②参照）また、ライティングポストテスト終了後のアンケート結果で、自己評価力・自己教育力についてデータをいくつか取り、具体的な内容を書いてあった割合をパーセントで表した。（図２参照）テストにおいて、できたことの内容を具体的に把握していた割合（next to – を使って場所について書けた。等）、できなかったことについて具体的な内容を把握していた割合（「～の通りに」の表現が書けなかった。等）、できなかったことに対してどんな学習が必要と思うのか、について具体的な学習内容を考えていた割合（先生に MD を借り、言うだけでなく書き取り練習をする。等）、そのために具体的に努力している割合（「表現」のプリントを見るようになった。等）である。４組は、努力していることに関しては、具体的な学習内容を書けていた割合は少ないものの、できたこと、できなかったこと、どんな学習が必要か、の 3 項目において、全て一番具体的な内容を書けていた割合が高かった。特に、できたことと、できなかったことについて、統制群の 40%および 24%と比較すると、４組の認識度が、それぞれ 47%と高い。この 47%は、自分自身のテストでの出来を、肯定的でも否定的でもなく、自分自身が何ができて、何ができなかったのかを具体的によく認識している割合だと考える。生徒自身が、何ができて何ができていないのか、次にできるようになるためには何をすればいいのかを認識するために、間違いを直接訂正するのみの即興のフィードバックより、Marking Policy に従って、どこが間違っているのか自分で考える過程を取り入れ、継続的に一定の方法で、生徒相互の評価や間違い訂正の作業を行ったクラスに有意差が見られた。

図２



② スピーキングテスト結果から

１組の A さんは、プレテストでは全く正確な発話ができなかったが、ポストテストでは８文正確な発話ができた。２組の B さんと３組の C さんは、ともに５文正確な発話数が伸びた。一番正確な発話数が伸びたのは、４組の D さんで、10 文正確な発話数を伸ばした。１組と４組は、授業中の言語活動後のフィードバックを Marking Policy を使って行ったので、１組の A さんと４組の D さんは、授業で使った「地域紹介をするための表現シート」の MD を借り自宅で練習をした。１組の A さんは、文として発話ができるように、休み時間ペアでの練習も行った。データ結果を見ると、発話の実験群に成果が大きく出ていることから、言語活動後のフィードバックを Marking Policy

で行ったことは、効果的だったと考える。（補遺　図２・３参照）また、スピーキングポストテスト終了後に、自己評価力・自己教育力を見るためのアンケートを行った。

図３　できなかったことに対してどんな学習が必要か

	１組ﾌﾟﾘ	１組ﾎﾟｽﾄ	２組ﾌﾟﾘ	２組ﾎﾟｽﾄ	３組ﾌﾟﾘ	３組ﾎﾟｽﾄ	４組ﾌﾟﾘ	４組ﾎﾟｽﾄ
わからない	20 ％	0 ％	0 ％	0 ％	0 ％	20 ％	0 ％	0 ％
取り組む姿勢	60 ％	57 ％	20 ％	0 ％	67 ％	40 ％	25 ％	22 ％
努力項目	0 ％	14 ％	20 ％	67 ％	17 ％	0 ％	50 ％	0 ％
具体的な学習	20 ％	29 ％	60 ％	33 ％	16 ％	40 ％	25 ％	67 ％

「できたこと」「できなかったこと」については、各クラスの有意差はあまり出なかったが、「できなかったことに対して、自分がどういう学習をしていけばいいのか」については、４組のスピーキングテストを受けた生徒の 67%が、自分の課題や取組やすさなどを考慮し、他クラスと比べ、具体的な学習内容を書けていた。中でも、プレテストでは全くまったく文として正確に発話ができなかった４組の D さんは、「詳しく自分でレポートをし、間違いを先生などに直してもらう」学習をしていきたいと答え、様々な表現を使ってできるだけ多く発話し、間違いや正しい表現を確認することの大切さをあげた。「地域紹介表現」の MD を借り、自宅で練習し、休み時間にはペアで会話練習をした D さんは、自分が実際にできる学習として、発話の間違いを誰かに直してもらえると考えているようだった。一方、授業中の発話やワークシートのフィードバックを、無計画に直接その場で間違いを訂正した３組の C さんは、「手持ちの教科書の CD などを使って、音読練習をする。」と答えてくれたが、実際にそういった学習を自分でするのか聞くと、「おそらくしないだろう」という返事が返ってきた。生徒が言いたい表現を言えるようにする指導として、実際に生徒に発話をさせてみて、フィードバックの計画を幾通りか準備しておくことが、個々の生徒の課題に対応するためには必要だと感じた。また、そのように指導をしていくことが、生徒の自己評価力・自己教育力を高めていくことになると思った。

③　自己評価・相互評価から

行動目標の１つとしてあげていた「指導教員や級友のアドバイスを判断して、時には受け入れ、時には拒絶して、自分の原稿をよりよくすることができる。」の部分の判断資料として、授業の自己評価表および相互評価表で、原稿の訂正ができたのか、発表の時、質問やコメントを英語でできたのか、ペアでチェックし合えたのかを見た。それぞれ、評価は１・２・４・５の３を除いた４段階でデータを取った。原稿の訂正、コメントなどの発言、ペアでのチェックは、４組ができたと答えている。原稿の訂正については、４組の 28 人の生徒ができたと認識しており、英語での質問・コメントについても、23 人ができたと認識し、「１」の評価（全くできなかった）と感じた生徒はいなかった。授業中に Marking Policy を使って指導した１組が、質問・コメントの発話が、４組に次いでできたと答えている。（図６・７参照）

図６　３時間目の自己評価から（４段階評価で３はなし。５がよくできたことを示す。）

	１　組				２　組				３　組				４　組			
	1	2	4	5	1	2	4	5	1	2	4	5	1	2	4	5
原稿の間違いを訂正できた	4	7	12	6	0	10	9	9	1	7	10	10	2	1	11	17
質問･コメントができた	5	5	12	7	2	11	12	3	1	10	10	6	0	8	6	17

図７　３時間目の相互評価から　（十分できていたと○が入っていた人数）

	１　組	２　組	３　組	４　組
ペアでチェックした	21 名	19 名	22 名	25 名

(5)　考察

検証授業におけるデータから、授業中及びワークシートなどを、Marking Policy に基づいて、フィードバックを事前に計画・準備をしたクラスが、自己評価力・自己教育力を高めることにおいて、優位性が見られた。また、実際の技能を伸ばすことにおいても、「話すこと」と「書くこと」において、優位性が見られた。（ワークシート指導のみ Marking Policy で指導をしたクラスが、ワークシートのフィードバック計画をせず指導したクラスと比べると、ライティングテストで少し優位性が見られた。（補遺（Appendix）ライティングテスト結果及びスピーキングテスト結果参照）また、授業中のみフィードバック計画・準備をしたクラスが、しなかったクラスと比べると、「地域紹介のスピーチ」において質問・コメントができていた。事前にフィードバックの計画・準備をしなかったクラスが、授業中原稿をペアでチェックできたり、ライティングテスト結果においても予想以上に結果が良かったのは、フィードバックにかかわらず、昨年担任をした生徒たちが、わからないことは積極的に教員に正しい答えを聞き、活動に非常に熱心に取り組んでくれたためと考える。そして、仮説の「各言語活動に適したフィードバックを継続して行うことにより、生徒の自己評価力・自己教育力を高めることができる」は認められたと判断する。

今回、Marking Policy を使ってのフィードバックを行って、特に生徒に好評だったのは、MD の貸出だった。授業の最初に行った「地域紹介をするための表現シート」の MD の貸出を１組と４組で行ったが、用意していた８本の MD が、１組・４組ともに希望者が多く、急遽追加で貸出用 MD を準備した。音のフィードバックは、音で練習ができるよう、事前に計画準備をしたが、計画する前には、MD の録音に時間がかかり現実的でないのではないか、また貸し出した MD の回収が大変ではないかと心配をした。しかし、AFL の考え方でいくと、全員に等しくフィードバックを行う必要はなく、必要な場面で、こうして計画・準備をすることで、学習のための評価および指導を行えばいいこと、また、イギリスの多くの学校でそういったフィードバックが現実に行われていることを知り、MD の貸出を試みた。実際にやってみると、準備も 15 分程度ででき、MD も２・３日で回収できた。生徒の反応を考えると、事前に準備を多少必要としても、フィードバックを事前に計画し、指導をすることで、生徒の学習選択の幅を広げ、多様な生徒の支援が可能になると感じた。また、こうした個々に対応できるフィードバックを、生徒は強く望んでいるのだと実感した。フィードバックを事前に計画・準備をすることが、指導と評価の一体化を考えた時、本当に大切だと感じた。

４　まとめと今後の課題

指導と評価の一体化を目指すために、①年間計画の中に、何をどう評価するのかの柱を決め(AOL)、②そのために、どう指導し診断的な評価をするのかの計画を立て(AFL)、③評価について、どうフィードバックし、個々の生徒を支援するのか、計画・準備をすることが大切である。Marking Policy を使って今回取り組んだように、一定の評価・フィードバックシステムを授業の中に構築することで、授業における評価者が、教員から徐々に生徒に移り、生徒同士で学び合いができるようになっていく。また、生徒の持つ多様な課題に対して、いくつか支援の手段を考えておくことで、生徒が自己選択できる学習の選択肢を提示することができる。フィードバックは、「振り返り」「反省」に終わることなく、次の活動によりよい形でつなげていこうとするフィードフォワード（高島 2005）としてとらえ、生徒の自主性を育て、言語知識と共に実践的コミュニケーション能力の育成へと、総合的にフィードフォワードさせていくことが重要である。

今後の課題として、生徒の実態を考慮し、AOL と AFL を適宜見直すとともに、Marking Policy に位置

づけた評価方法や支援方法も改良していく必要がある。また、「聞くこと」「話すこと」「読むこと」「書くこと」の４技能を伸ばしていくために、技能重視型の授業のプログレスカードを使用するなど、評価の返し方もより工夫していかなくてはならない。副票に関しても、観点別の視点だけでなく、より技能の力を意識した副票に改良していかなくてはならない。

５　教育課題との関連

第２期土佐の教育改革の柱の一つに「子どもたちの基礎学力の定着と学力の向上」があり、わかる楽しい授業づくりを進めることが課題となっている。

英語教育においては、実践的なコミュニケーション能力を生徒に身に付けさせるため、言語の実際の使用場面に配慮した指導を行うことが求められている。学習場面に応じて適切な指導及び評価を行い、フィードバックをすることによって、基礎・基本の定着を図らなければならない。英語教員は、３年間の到達目標を設定し、１年生から段階を追って年間計画を立て、評価規準を明確にしたうえで日々の授業に取り組むべきである。

今回の研究では、特に「話すこと」と「書くこと」に着目した。英語が話せても、書くことができない、あるいは苦手である生徒がたくさんいる。しかし、「話す」前に「書く」ことが正確にできなければ、「話す」力も定着しない。生徒が自分の力を知り、自分に合った学習方法を見つけるための手だてが必要である。各クラスわずか３時間の検証授業ではあったが、教師からの総合評価、生徒の自己評価、生徒同士の相互評価の３つの評価方法や様々な言語活動を取り入れることによって、「話すこと」と「書くこと」の力が向上してきたと思われる。定期テスト等のペーパーテストでは測れない、生徒の力や学習意欲を引き出すことができる評価方法や指導方法を工夫し、「英語の授業がよくわかる」「英語の授業が楽しい」「英語を話したい」と生徒が感じるような授業をめざしていきたい。

＜引用文献＞

高島英幸(編著)(2005)『＜文法項目別＞ 英語のタスク活動とタスク：34 の実践と評価』大修館書店
松沢伸二(2004)「英語教師のための新しい絶対評価法：生徒の学習を支援するために」評価に関しての学習会

＜主な参考文献＞

金谷　憲(2003)『英語教育評価論』河源社
北原延晃(2004)「北研夏期講座冬季講座資料」
国立教育政策研究所 教育課程研究センター(2003)『平成１３年度小中学校教育過程実施状況調査報告書中学校英語』ぎょうせい
小室俊明(2001)『英語ライティング論』河源社
佐野正之（編著）(2000)『アクション・リサーチのすすめ：新しい英語授業研究』大修館書店
高島英幸（編著）(2000)『実践的コミュニケーション能力のためのタスク活動と文法指導』大修館書店
西岡加名恵(2003)『教科と総合に活かすポートフォリオ評価法』図書文化社出版
根岸雅史(2004)「観点別・絶対評価のあり方」平成 16 年度英語教員指導力向上研修夏期集中研修
馬場哲生(1997)『英語スピーキング論』河源社
平田和人（編著）(2002)『中学校英語科の絶対評価規準づくり』明治図書
平田和人（編著）(2003)『中学校英語科 絶対評価の方法と実際』明治図書
本多敏幸(2003)『到達目標に向けての指導と評価』教育出版
松沢伸二(2004)「英国学校外国語教育での絶対評価の実例」評価に関しての学習会
松沢伸二(2002)『教師のための新しい評価法』大修館書店
文部省(1999)『中学校学習指導要領解説－外国語編－』東京書籍

Barnes, A. & Hunt, M.(2003)*Effective assessment in MFL.* CiLT.
Ellis, R.(2003)*Task-based Language Learning and Teaching.* Oxford University Press.
Harmer, J.(1991)*The Practice of English Language Teaching.* Longman.
Littlewood, W.(1981)*Communicative Language Teaching.* Cambridge University Press.
Larsen-Freeman, D.(2003)*Teaching Language: From Grammar to Grammaring*. Boston, MA: Thomson and Heinle.
Ofsted(2003)*Good Assessment in Secondary Schools.* Ofsted Publication.

補遺（Appendix）

ライティングテスト結果

図１―①

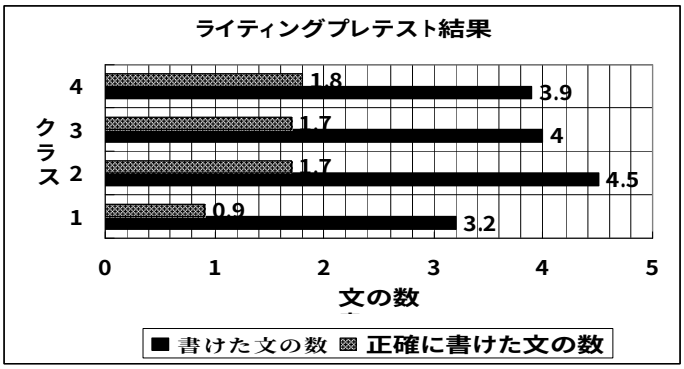
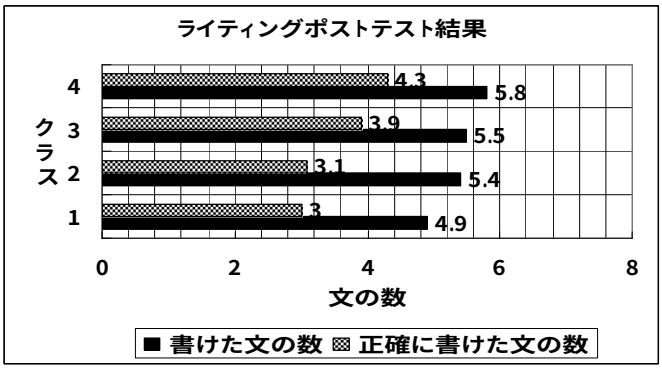


図１―②



ライティングテストにおける間違いの内容　（５個以上を抽出）

	プリテストにおける間違いの内容		ポストテストにおける間違いの内容	
３組（統制群）	文の構成（成立）	29	冠詞(a,an,the の欠落)	22
	語順	10	文の構成（成立）	8
	動詞	10	単語のスペル	7
	冠詞(a,an,the の欠落)	8	複数形ｓ	7
	文法構文	7		
４組（実験群）	文の構成（成立）	44	冠詞(a,an,the の欠落)	19
	冠詞(a,an,the の欠落)	12	文の構成（成立）	10
	語順	6	単語のスペル	8
	単語のスペル	5	複数形ｓ	6

スピーキングテスト結果

図２―①

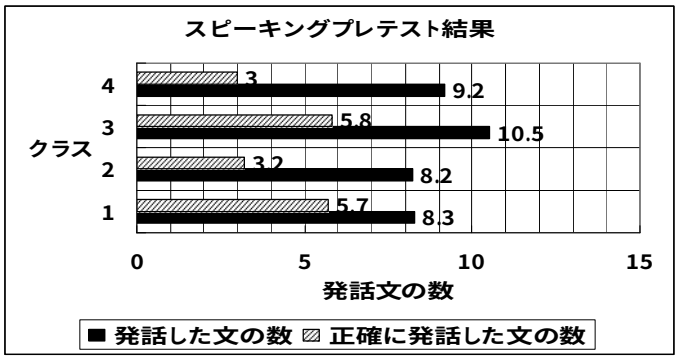


図２―②

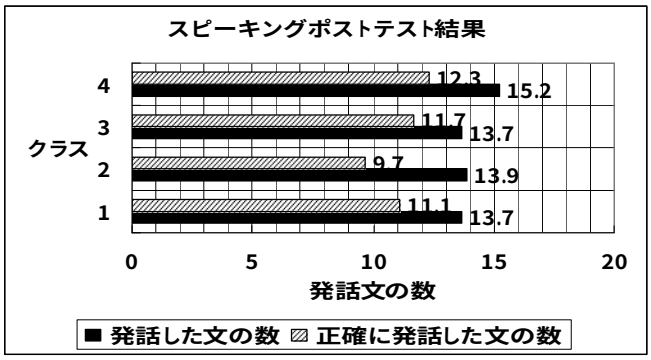
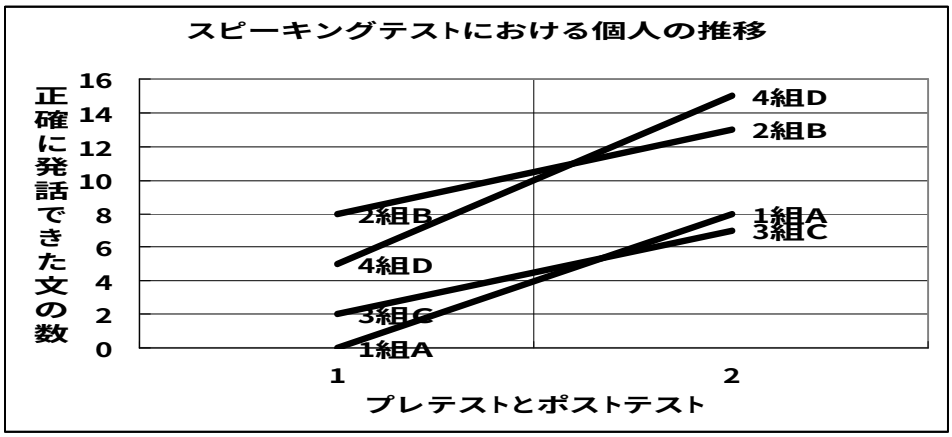


図３　正確な発話文の数



２年評価活動計画

「話すこと」を中心として

	AOL	AFL
一学期	Show & Tell　（4月） 「自分の宝物を紹介しよう！」	宝物紹介グループ活動（S） スピーチ原稿（W）
	スキットコンテスト　（5月） 「入国審査と高知観光」	入国審査のロールプレイ（R） 「高知の観光地や名物紹介」 スキット原稿（W）
	インタビューテスト*　（7月）	ペアインタビュー活動　(S) TOAs (Task-Oriented Activities) (S) タスク活動（TA: Task Activity) （現在形＆過去形＆未来形)(S)
	ショート・スピーチ　（9月） 「夏休みの思い出を話そう」	グループインタビュー活動（S） スピーチ原稿（W）
二学期	タスク活動（TA: Task Activity) (can & will & have to － not have to を含む）（10月）	Let's Speak English! ペアインタビュー活動（S） TOAs (Task-Oriented Activities) (S)
	プチ 英語劇　（11月）	人形劇のロールプレイ　(R) 劇原稿　(W)
	Show & Tell * 「地域を紹介しよう」(12月)	TOAs　(Task-Oriented Activities) (S) タスク活動（TA: Task Activity) （There is [are] - & - is ～)(S) 地域紹介原稿（W）
三学期	タスク活動(TA: Task Activity) （比較級 & 最上級 －more、 most、better を含む）（2月）	スピーチ「好きな物・事」(S) アンケートクイズ　(L)(S) TOAs　(Task-Oriented Activities) (S)
	インタビューテスト*　（3月）	Let's Speak English! Picture Describing　(S) Free Talk 活動　(S)
	３年生の活動へ	

＊　各学期末には、教科書の音読テストと課題英作文を実施する。